

## 乳幼児と動物飼育活動

### 一 岩手の幼稚園・保育園の実態調査(続報4)

#### 統合保育実施園と未実施園での「有効性」の相違 —

鎌田文聰

(2002年9月26日受理)

#### 問 題

「動植物飼育・栽培活動」に関する保育園、幼稚園における岩手の実態調査研究(鎌田:1999, 鎌田:2000, 鎌田:2001)から、「動植物飼育・栽培活動」や「動植物との触れ合い活動」が乳幼児にとって良かった点として、概略、以下の諸点が明らかにされてきた。

①「自然や生き物や植物に直接触れることができ、極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」という点が、「動物飼育活動」では100%の園で、「植物栽培活動」では96.6%の園であげられた。このことは、「極く自然にそれらに対する興味や関心が培われる」ことがあってこそはじめて、その後の対応の仕方や感じ方や考え方、さらには、そのあり方が形成されていくものであることを示している点で、その意義は極めて大きい。

②「優しさや思いやりが育つ」という点は、「動物飼育活動」では94.5%の園で、また「植物栽培活動」では64.7%の園であげられた。注目すべきことは「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも3割ほどより高いことであり、今後の取り組みに際して、考慮すべき重要な点である。

③「生死や成長や生態を理解できる」という点は、「動物飼育活動」で88.0%、「植物栽培活動」では62.9%の園であげられた。生命の大切さを感じ得る基礎としての就学前教育にとって、如何に大切な活動であるかを示している。特に「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも2.5割ほど高い割合を示していたことの意味は、「植物栽培活動」はもとより、「動物飼育活動」も今後の取り組みに際して、重視すべき活動であることを示唆している。

④「子ども同士の仲間関係にも好影響をもたらす」という点は、「動物飼育活動」で43.6%、「植物栽培活動」では37.9%の園であげられるにとどまっていた。どちらにおいても40%前後とそれ程多いとはいえない。しかし、どちらがより「仲間関係にも好影響をもたらす」活動になっているのを見ると、園の種別を越えて前者の「動物飼育活動」であることが示唆されている。

⑤「表現活動につながる」、「職員や保育内容にも好影響」、「科学的な態度や力が育つ」といったことも園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点として、園種別を越えて共通的に挙げられた。「植物栽培活動」の方が「動物飼育活動」よりも5~10%前後も高い。とりわけ、「科学的な態度や力が育つ」では、「植物栽培活動」で29.0%、「動物飼育活動」で24.7%の園であげられているにとどまっていたが、後者よりも4.3%程ではあるが、前者の「植物栽培活動」の方が高

く、今後の取り組みに際して注目すべきであることを示唆している。

⑥ 動物の子どもが生まれたとき、そうした生まれたばかりの子どもに、「触れさせたり、抱っこさせたりする」だけだと「優しさや思いやりが育つ」との相関係数は、0.37とそれほど高いとは言えないことが示された。しかし、「図鑑でいろいろな飼育の仕方を調べたり、じっくりと生まれた子どもの様子を調べたりすること」により、その相関は0.89とかなり高い。とりわけ、職員と子どもが一緒になって「動物の子どもの誕生を感動し合ったり、一緒に喜び合ったりする」ことにより、その相関は0.91とより高くなっていることが示される等、感覚的に捉えたものを、より高次な認識に高めていく取り組みが重要であることが示唆された。

⑦ 動物の子どもが死んだとき、「職員が子どもの目に触れないようにそっと始末する」だけだと「優しさや思いやりが育つ」との相関係数は、 $-0.31$ と、むしろ逆相関であることが示された。特に配慮すべき点であることが窺える。

⑧ 「天国のこと等を話し合ったりする」対応でも、「優しさや思いやりが育つ」との相関は0.43とそれほど高いとはいえないことが示された。さらに、「職員と子どもが一緒になって墓などつって埋める」ことにより、その相関は0.46と多少は高くなっているものの、やはり、それ程高いとはいえないことも示された。大切なことは、「死んだ時にこそ、子どもと一緒に生についてじっくり話し合ったり、そのうえで一緒に丁寧に弔ったりする」対応が、重要であることが改めて示されている。ちなみに、その相関は0.81であった。

⑨ 「生、死」への対応としての上述のことからも窺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応を大切にしているが、「飼育している動物が死んだとき」の対応の方を、より多くの園で重視していることが窺える。

⑩ 幼児期に、こうした「動物が死んだときの対応」として大切なことは、「死んだ時にこそ、子どもと一緒に日々飼育してきた目の前のその動物の生死についてじっくり話し合い、そのうえで一緒に丁寧に弔ったりする」といった対応が、生命の大切さや優しさを育み、「共生」を重視するその後の「心の成長・発達」にとって、とりわけ重要であるということを示唆している。

⑪ 「天国のこと等を話し合ったりする」とか「職員と子どもが一緒になって墓などつって埋める」といった対応も一定程度有効ではある。しかし、特に配慮しなければならないことは、「職員が子どもの目に触れないようにそっと始末する」といった対応をさけることである。そうした対応は、時に逆効果をもたらしかねないということを肝に命じる必要がある。

⑫ 「動物の子どもが生まれたときの対応」も重要であることは明らかである。特に、職員と子どもが一緒になって「動物の子どもの誕生を感動し合ったり、一緒に喜び合ったりする」ことが「優しさ」を育む上で最も大切な取り組みである。もちろん、「図鑑でいろいろな飼育の仕方を調べたり、じっくりと生まれた子どもの様子を調べたりすること」も大切であることは論を待たずもない。しかし、単に「触れさせたり、抱っこさせたりする」だけだと、それほど「優しさ」を育むことには有効に作用するわけではないことにも留意する必要がある。

上記のように「動物飼育活動」や「植物栽培活動」が乳幼児期の子どもにとっての有効性が明らかにされてきた。ここでは、これらの諸点も踏まえうえて、乳幼児期（就学前）の子どもにおける「動物介在活動（Animal Assisted Activity：AAA）」についての基礎的研究として提起するものである。本稿では、筆者が1998年10月1日～11月30日までに実施した「動植物介在活動に関するアンケート調査研究」を下に、継続的に報告しているその第4報として、障害児を含めた統合保育を実施している園と統合保育未実施園での動物飼育活動の「良かった点：有効点」に焦点を当て、それらの結果を比較考察するものである。つまり、統合保育を実施しつつ、動物飼育活動をしている保育園や幼稚

園の方が、統合保育未実施園での動物飼育活動の有効点よりも、全般的により高いのか、同程度なのか、あるいは低いのか、また、その程度はどの程度なのかについてである。障害児の統合保育・教育との関連での動物飼育活動研究は、極めて重要であると考えられるが、筆者の知る限りそうした研究はほとんど無く、本研究がはじめてのものである。

### 研究目的

岩手県内にある就学前教育の場である保育園や幼稚園や託児室における動物飼育活動の「良かった点(有効性)」に視点を当て、障害児や障害の疑いのある子どもを含めた統合保育を実施している園と統合保育を実施していない園での有効性の実態を明らかにすること、と同時に、それらの程度を比較分析、検討することを通し、より生命を重視した「共生」をベースに、21世紀のよりよい統合保育・教育の在り方を動物飼育教育活動の在り方を通して考察することを目的とする。

### 研究方法

1998(平成11)年10月から11月末まで、岩手県内にある認可・無認可保育園、託児所や幼稚園(季節により休園中またはすでに休園となっている園は含まない)のすべての園を対象に、以下の六点を焦点をあてた26項目のアンケート調査を郵送方式で実施し回収する。

1. 園の規模、障害児や障害の疑いのある子どもの入園状況
2. 園のある地域の自然環境(1988(平成1)年と1998(平成10)年の変化)
3. 飼育・栽培している動植物の種類と数
4. 子どもと動植物との関わり方(毎日の世話や、動植物の誕生、芽が出たときまた、死や枯れたことを経験した時)
5. 園として動植物の飼育・栽培活動へのとらえかた(よかったこと、研修の機会等)
6. 動植物の飼育・栽培活動における悩みや困難

### 結果と考察

#### 1) アンケート調査を依頼した岩手県内の保育園・幼稚園

アンケート調査対象園は、岩手県内にある国公市町村、私立また認可、無認可を問わず、全ての保育園や幼稚園である。大別すると、保育園444園、幼稚園130園、合計574園であった。認可・公立保育園が178園と最も多く、ついで認可・私立保育園が155園であり、認可・公立幼稚園68園、認可・私立幼稚園62園と、認可が無認可の保育園111園の4倍以上であった。

#### 2) 回答のあった岩手県内の保育園・幼稚園数

有効回答を得た岩手県内の幼稚園(96園:73.3%)と保育園(302園:61.2%)は全体で391の園であり、ほぼ7割弱に当たる。認可・公立保育園からは、172園(96.6%)と最も多く、ついで認可・私立保育園の99園(63.9%)から、さらに認可・公立幼稚園からは58園(85.3%)、認可・私立幼稚園の38園(61.3%)、無認可・私立保育園の31園(27.9%)からも回答を得た。障害の疑いのある子どもが入っている園(以降:統合保育実施園と呼ぶ)が99園(24.7%)、入っていない園(以降:統合保育未実施園と呼ぶ)が302園(75.3%)であった。

## 3) 障害児や障害の疑いのある子どもの入園状況

- (1) 回答園にみる岩手県内での障害児や障害の疑いのある子どもの入っている園と入っていない園の数とその割合

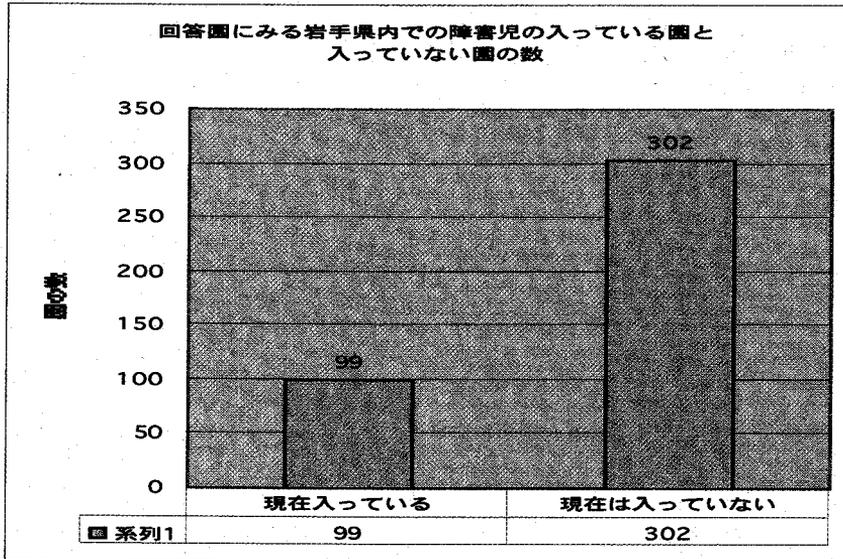


図1 回答園にみる岩手県内での障害児の入っている園と入っていない園の数と割合 (1998. 11 時点)

上の図1は、回答のあった保育園と幼稚園401園の中で、1998年11月時点で何らかの障害を持っている、または、障害の疑いのある子どもが入っている園（以下、統合保育実施園と記す）が99園（24.7%）、入っていない園（以下、統合保育未実施園と記す）が302園（75.3%）であり、ほぼ、4分の1の園で、統合保育が実施されていることを示したものである。

さらに、下図2、次頁の図3は、保育園と幼稚園のそれぞれにおける統合保育実施園と未実施園の割合を示したものである。保育園の統合保育園の割合が全保育園の28.0%、幼稚園での統合保育園のそ

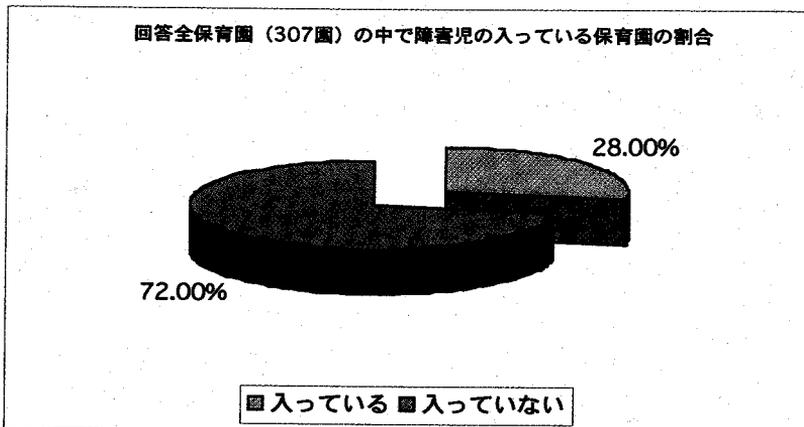


図2 回答全保育園（307園）の中で障害児の入っている保育園の割合 (1998. 11 時点)

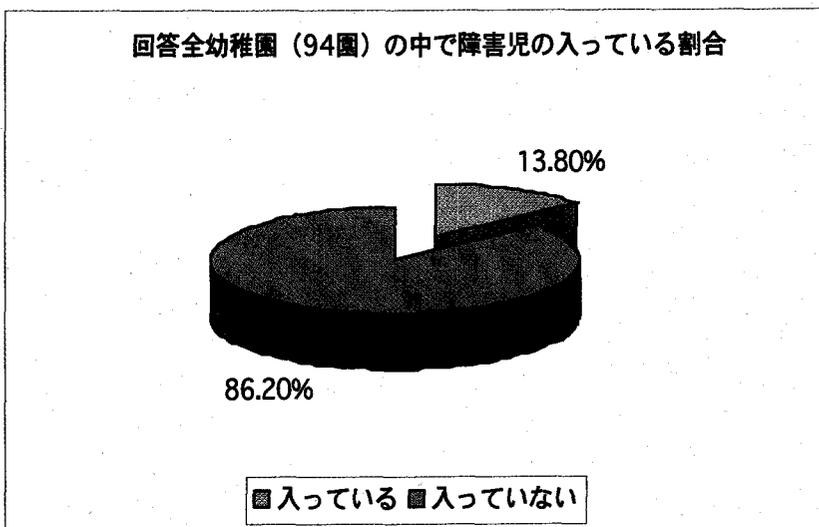


図3 回答全幼稚園（94園）の中で障害児の入っている保育園の割合（1998. 11時点）

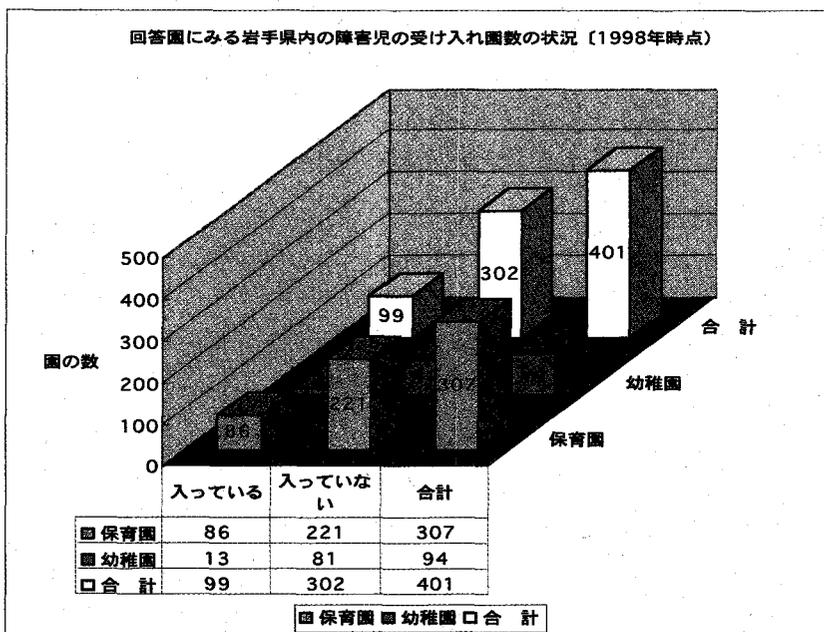


図4 回答園にみる岩手県内での障害児の入っている園と入っていない園の数とそれぞれの割合（1998. 11時点）

の割合は、13.8%と、保育園での統合保育の実施が、幼稚園のそのの2倍以上であることが窺える。また、保育園での統合保育園数と幼稚園での統合保育園数は、前者が86園（86.8%）、後者が13園（13.2%）であり、圧倒的に保育園での統合保育の実施園数が多いことが窺える。

上の図4は、回答のあった保育園や幼稚園の中で、障害児や障害の疑いのある子どもを受け入れている園のそれぞれの割合と実数を示したものである。この図から明らかな様に、回答のあった307園

の保育園のなかで障害児または障害の疑いのある子どもたちが、1998年11月1日時点で入っている割合は28% (86園)、入っていない園の割合は72% (221園)であった。ほぼ3分の1の保育園に入っている事が示されている。また、回答のあった94園の幼稚園の中では、そうした子どもたちが入っている園の割合は、13.8% (13園)、入っていない園の割合86.2% (81園)であった。ほぼ7分の1の幼稚園に入っているにすぎない事が示されている。

(2) 障害児や障害の疑いのある子どもの入っている保育園や幼稚園の種別毎の園児数の割合

下の図5, 6は、回答のあった401園の保育園と幼稚園に1998年11月1日時点で入園している総園児数が25,411名であることを示している。

障害児として把握されている園児は169名(0.67%)、障害の疑いのある園児は69名(0.27%)であり、両者合わせても、1パーセント未満であった。因みに、健常児は25,173名(99.06%)と、9割9分と、ほとんどが健常児であった。

今回の調査が、かなり、限定された条件の中でのものであったとしても、障害、および障害の疑いの有る子どもを含めた場合の推定出現率が、少なくとも4~5%前後としたとしても、1%未満の乳幼児のみが、岩手県内の保育園や幼稚園などにおいて統合保育を受けているという実態は、かなり、少ないということが窺える。

21世紀は、ノーマライゼーション社会の形成が重要と叫ばれている今日、就学前教育の大切さとの観点からも、統合保育のニーズとの関連で、さらに深く考慮すべき実態にあると考えられる。

また図6では、年齢別クラスでそれぞれの人数を見たものである。障害児の年齢別クラスでは0歳児クラスでは0名であり、1歳児クラスで5名、2歳児クラスで8名、3歳児クラス29名、4歳児クラス60名、年長の5歳児クラスでは67名であった。

また、障害の疑いのある子どもでは、0歳児クラスでは0名であり、1歳児クラスで4名、2歳児クラスで7名、3歳児クラス17名、4歳児クラス22名、年長の5歳児クラスでは19名である。

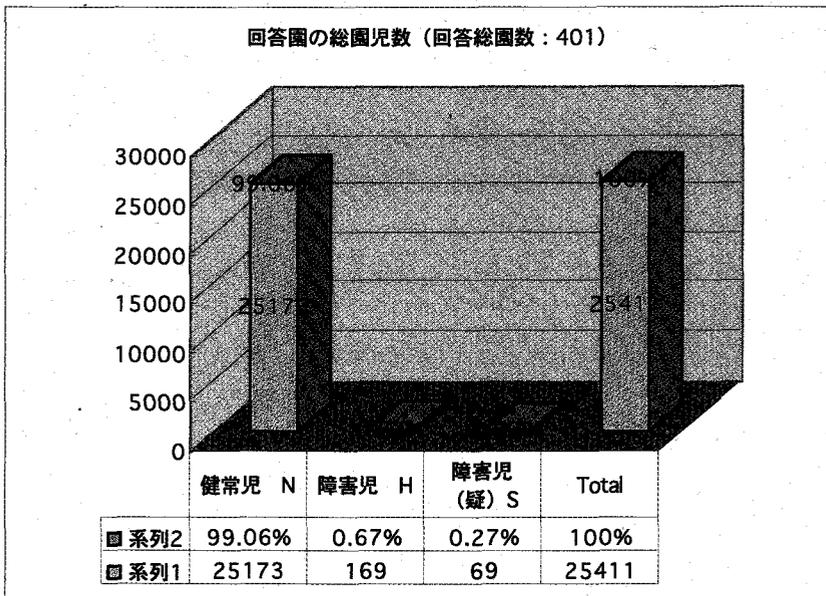


図5 回答園にみる岩手県内の健常児、障害児及び障害児(疑)の受け入れ園児数(1998.11時点)

いずれも、年齢が高くなるにつれて、多くなっている。とりわけ、3、4歳児クラス以降が多くなっている。保育園や幼稚園児の受け入れが、この時期から多くなってきていることを示している。

また、健常児では0歳児クラスで847名、1歳児クラスで1,676名、2歳児クラスで2,169名、また3歳児クラスでは5,245名、4歳児クラスで7,388名、年長の5歳児クラスでは7,848名である。

健常児についても、年齢が3歳以降、園児数も多くなっている。幼稚園において、この時期からの受け入れが多くなってきていることによる。

(3) 回答園にみる健常児および障害児や障害の疑いのある総園児数

障害児の年齢別クラスでは0歳児クラスでは0名であり、1歳児クラスで5名、2歳児クラスで8名、3歳児クラス29名、4歳児クラス60名、年長の5歳児クラスでは67名であった。

また、障害の疑いのある子どもでは、0歳児クラスでは0名であり、1歳児クラスで4名、2歳児クラスで7名、3歳児クラス17名、4歳児クラス22名、年長の5歳児クラスでは19名である。

いずれも、年齢が高くなるにつれて、多くなっている。とりわけ、3、4歳児クラス以降が多くなっているのは、保育園や幼稚園児の受け入れが、この時期から多くなってきていることによる。

さらに、健常児では0歳児クラスで847名、1歳児クラスで1,676名、2歳児クラスで2,169名、また3歳児クラスでは5,245名、4歳児クラスで7,388名、年長の5歳児クラスでは7,848名である。

健常児についても、年齢が高くなるにつれて、園児数も多くなっている。なかでも3、4歳児クラス以降が多くなっているのは、とりわけ幼稚園において、この時期からの受け入れが多くなってきていることによる。

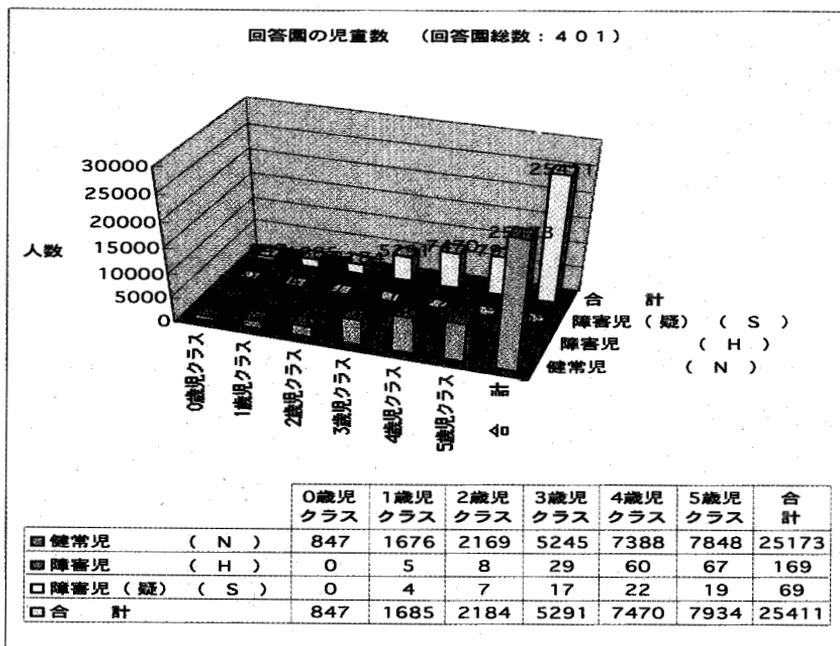


図6 回答園にみる岩手県内の健常児、障害児及び障害児(疑)の年齢別クラスの園児数(1998. 11時点)

## 4) 統合保育実施園と統合保育未実施園における動物飼育活動の有効性の相違

## (1) 全回答園にみる統合保育実施園と統合保育未実施園の動物飼育活動の有効性の相違

表1 全回答園にみる統合保育実施園と未実施園の動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数：105	統合保育未実施園数：288
優しさや・思いやりが育つ	78.5%	68.6%
生死・成長・生態を理解できる	84.2%	58.7%
自然・生き物に直接触れられる	87.2%	75.9%
科学的な態度や力が育つ	25.6%	16.7%
園生活の動機づけになる	31.7%	27.2%
仲間関係にも好影響	36.5%	31.8%
職員や保育内容にも好影響	40.1%	25.8%
表現活動につながる	38.8%	25.3%

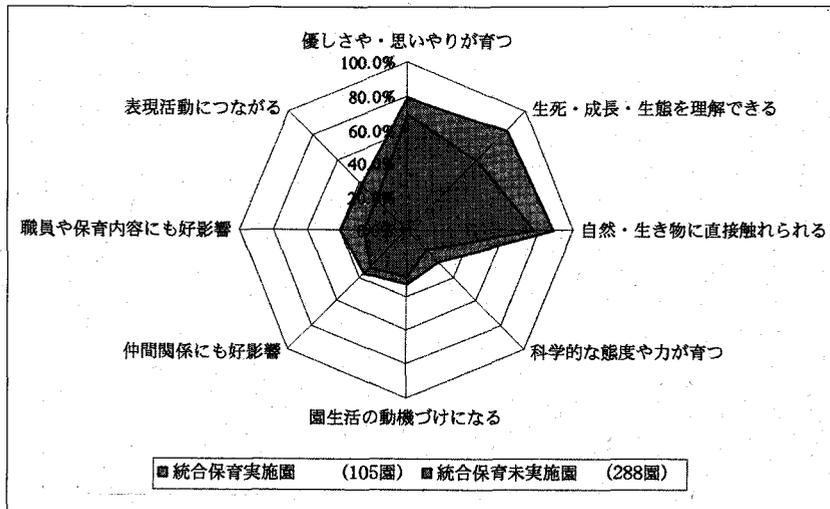


図7 全回答園にみる統合保育実施園と統合保育未実施園の動物飼育活動の有効点

上の表1, 図7から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 動物飼育活動を実施している幼稚園, 保育園, 託児所の全回答園に見る限り, 統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に有効性が高い割合で挙げられていることである。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は, 統合保育実施園で78.5%, 統合保育未実施園では, 68.6%と統合保育実施園の方が9.9%と, ほぼ1割も高いことが示された。このことの持つ意味は大きいと考えられる。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は, 統合保育実施園で84.2%, 統合保育未実施園では, 58.7%と統合保育実施園の方が25.5%と実に2.5割も高いことが示されている。このことの持つ意味も大きいと考えられる。
- ④ 「生き物に直接触れられる」は, 統合保育実施園で87.2%, 統合保育未実施園では, 75.9%と統合保育実施園の方が11.3%とほぼ1割強も高いことが示されている。
- ⑤ 「科学的な態度や力が育つ」は統合保育実施園で25.6%, 統合保育未実施園では, 16.7%と統合保育実施園の方が8.9%とほぼ1割弱ではあったが高いことが示されている。
- ⑥ 「仲間関係にも好影響」は, 統合保育実施園で36.5%, 統合保育未実施園では, 31.8%と統合保育実施園の方が4.7%と若干高いことが示されている。
- ⑦ 「職員や保育内容にも好影響」は, 統合保育実施園で40.1%, 統合保育未実施園では, 25.8%と統合保育実施園の方が14.3%とほぼ1.5割も高いことが示されている。
- ⑧ 「表現活動につながる」は, 統合保育実施園で38.8%, 統合保育未実施園では, 25.3%と統合保育実施園の方が13.5%とほぼ1.5割弱ではあったが, やはり高いことが示されている。
- ⑨ 「園生活の動機づけになる」では, 統合保育実施園で31.7%, 統合保育未実施園では, 27.2%と統合保育実施園の方が4.7%ではあったが, やはり多少高いことが示されている。

(2) 公立幼稚園における統合保育実施園と統合保育未実施園での相違

表2 公立幼稚園における統合保育実施園と未実施園にみる動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数：3	統合保育未実施園数：55
優しさや・思いやりが育つ	85.5%	66.7%
生死・成長・生態を理解できる	76.4%	66.7%
自然・生き物に直接触れられる	100.0%	89.1%
科学的な態度や力が育つ	33.3%	29.1%
園生活の動機づけになる	33.3%	47.3%
仲間関係にも好影響	66.7%	54.5%
職員や保育内容にも好影響	66.7%	40.0%
表現活動につながる	66.7%	25.5%

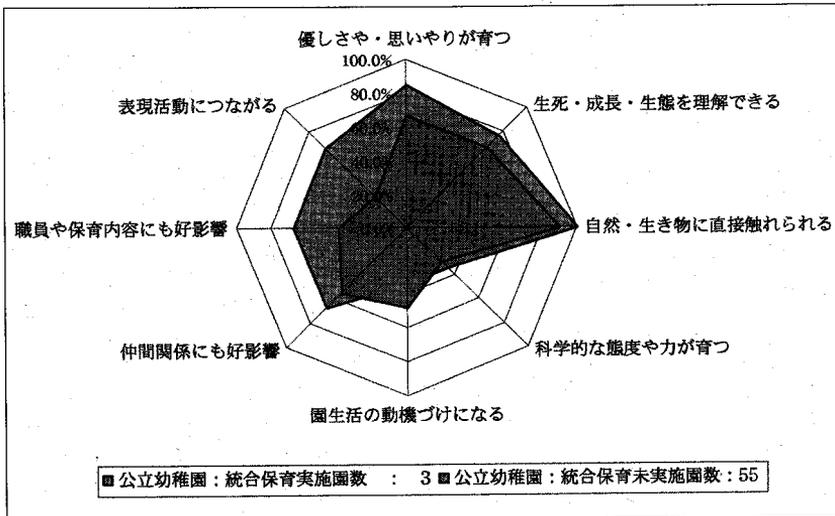


図8 公立幼稚園における統合保育実施園と統合保育未実施園にみる動物飼育活動の有効点

上の表2、図8から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 公立幼稚園における統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に有効性が高い割合で挙げられていることである。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で85.5%、統合保育未実施園では、66.7%と統合保育実施園の方が18.8%と、ほぼ2割も高いことが示された。このことの持つ意味は大きいと考えられる。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で76.4%、統合保育未実施園では、66.7%と統合保育実施園の方が9.7%とほぼ1割も高い。このことの持つ意味も大きいと考えられる。
- ④ 「生き物に直接触れられる」や「科学的な態度や力が育つ」は前者がほぼ8割前後、後者が3割前後と統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に若干有効性が高い割合で挙げられているもののそれほど違いは認められないことである。
- ⑤ 「仲間関係にも好影響」や「職員や保育内容にも好影響」や「表現活動につながる」は、いずれも、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的にほぼ12%から41%ほど有効性が高い割合で挙げられていることである。特に、「職員や保育内容にも好影響」では、前者が、66.7%であるのに対して、後者が40.0%と26.7%も高いことや、また「表現活動につながる」では、前者が、66.7%であるのに対して、後者が25.5%と実に、41.2%も高いことは、注目に値する。
- ⑥ しかし、「園生活の動機づけになる」では、逆に統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも14%も低い割合あげられていた。

## (3) 私立幼稚園における統合保育実施園と統合保育未実施園での相違

表3 私立幼稚園における統合保育実施園と未実施園にみる動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数：11	統合保育未実施園数：26
優しさや・思いやりが育つ	90.9%	80.8%
生死・成長・生態を理解できる	90.9%	69.2%
自然・生き物に直接触れられる	90.9%	84.6%
科学的な態度や力が育つ	27.3%	15.4%
園生活の動機づけになる	45.5%	34.6%
仲間関係にも好影響	54.5%	38.5%
職員や保育内容にも好影響	45.5%	26.9%
表現活動につながる	36.4%	26.9%

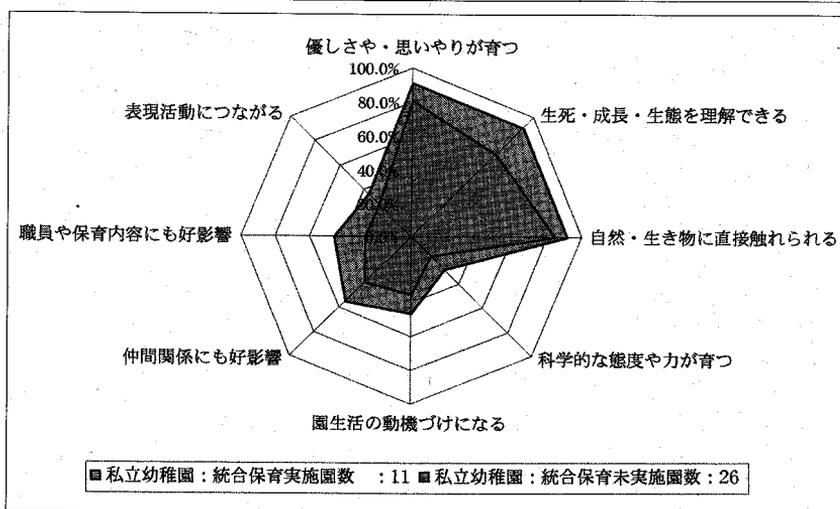


図9 私立幼稚園における統合保育実施園と統合保育未実施園にみる動物飼育活動の有効点

上の表3、図9から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 私立幼稚園における統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に有効性が高い割合で挙げられていることである。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で90.9%、統合保育未実施園では、80.8%であげられており、統合保育実施園の方が10.1%、ほぼ1割ほど高い。このことの意味は大きいと考えられる。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で90.9%、統合保育未実施園では、69.2%であげられており、統合保育実施園の方が21.7%、ほぼ2割も高い。このことの意味も大きいと考えられる。
- ④ 「生き物に直接触れられる」は、統合保育実施園で90.9%、統合保育未実施園では、80%と統合保育実施園の方がほぼ1割も高い。
- ⑤ 「科学的な態度や力が育つ」は、統合保育実施園で27.3%、統合保育未実施園では、15.4%と統合保育実施園の方が11.9%とほぼ1割強も高い。
- ⑥ 「仲間関係にも好影響」や「職員や保育内容にも好影響」や「表現活動につながる」の、いずれも、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的にほぼ10%から18%ほど有効性が高い割合で挙げられていることである。特に、「職員や保育内容にも好影響」では、前者が、45.2%であるのに対して、後者が26.9%と18.3%も高いことや、また「仲間関係に好影響」では、前者が、54.5%であるのに対して、後者が38.5%と実に、18%も高いことは、注目に値する。

(4) 公立保育園における統合保育実施園と統合保育未実施園での相違

表4 公立保育園における統合保育実施園と未実施園にみる動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数：53	統合保育未実施園数：116
優しさや・思いやりが育つ	77.4%	61.2%
生死・成長・生態を理解できる	86.8%	57.8%
自然・生き物に直接触れられる	84.9%	73.3%
科学的な態度や力が育つ	18.9%	18.1%
園生活の動機づけになる	28.3%	23.3%
仲間関係にも好影響	32.1%	28.4%
職員や保育内容にも好影響	34.0%	31.0%
表現活動につながる	39.6%	23.3%

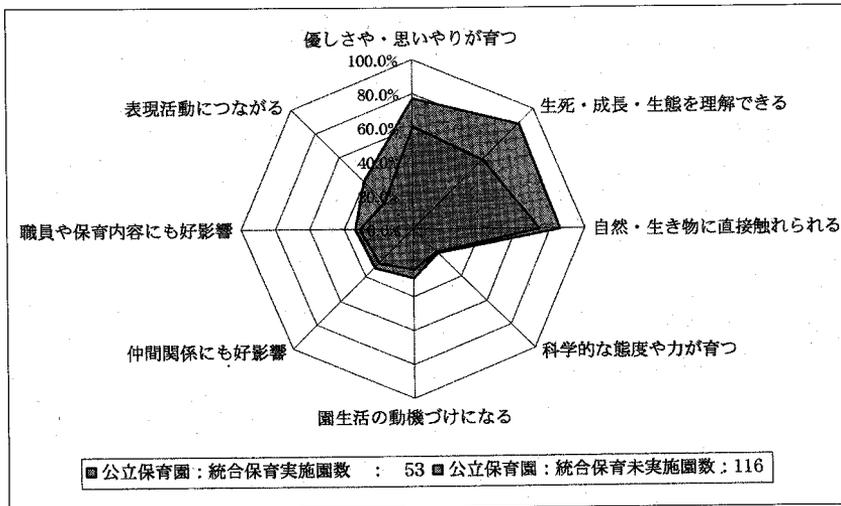


図10 公立保育園における統合保育実施園と統合保育未実施園にみる動物飼育活動の有効点

上の表4, 図10から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 公立保育園における統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に有効性が高い割合で挙げられていることである。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で77.4%、統合保育未実施園では、61.2%と統合保育実施園の方が16.2%も高い。このことの持つ意味は大きいと考えられる。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で86.8%、統合保育未実施園では、57.8%と統合保育実施園の方が29.0%とほぼ3割も高いことの持つ意味は特に大きいと考えられる。
- ④ 「生き物に直接触れられる」は、統合保育実施園で90.9%、統合保育未実施園では、73.8%と統合保育実施園の方がほぼ2割弱も高い。
- ⑤ 「科学的な態度や力が育つ」は、統合保育実施園で18.9%、統合保育未実施園でも、18.9%と統合保育実施園と同じ割合であった。
- ⑥ 「園生活の動機づけになる」、「仲間関係にも好影響」や「職員や保育内容にも好影響」や「表現活動につながる」の、いずれも、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的にほぼ4%から16%ほどと、多少幅はあるが、有効性が高い割合で挙げられていることである。特に、「表現活動につながる」では、前者が、39.6%であるのに対して、後者が23.3%と16.3%も高いことは、注目に値する。

## (5) 私立認可保育園における統合保育実施園と統合保育未実施園での相違

表5 私立認可保育園における統合保育実施園と未実施園にみる動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数：34	統合保育未実施園数：62
優しさや・思いやりが育つ	82.4%	71.0%
生死・成長・生態を理解できる	76.5%	69.4%
自然・生き物に直接触れられる	85.3%	80.6%
科学的な態度や力が育つ	23.5%	21.0%
園生活の動機づけになる	26.5%	24.2%
仲間関係にも好影響	29.4%	27.4%
職員や保育内容にも好影響	29.4%	27.4%
表現活動につながる	26.5%	33.9%

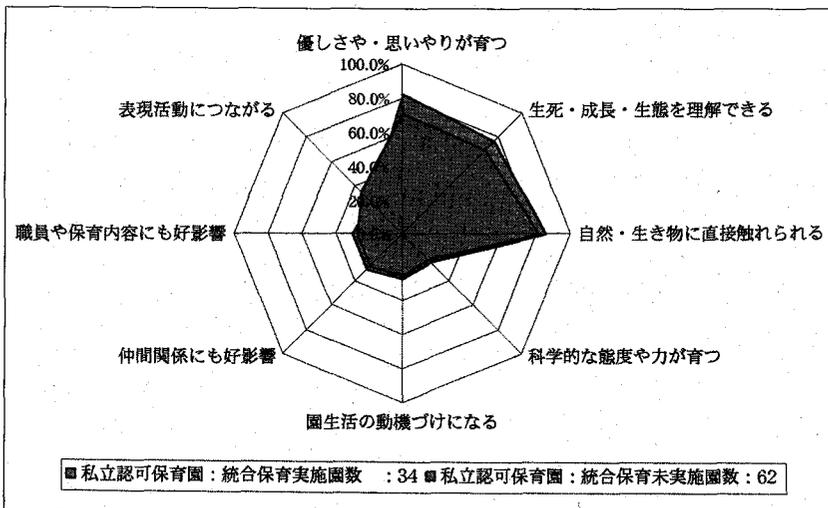


図11 私立認可保育園における統合保育実施園と統合保育未実施園にみる動物飼育活動の有効点

上の表5、図11から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 私立認可保育園においても、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的に有効性が多少高い割合で挙げられていることである。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で82.4%、統合保育未実施園では、71.0%と統合保育実施園の方が11.4%と、ほぼ1割程ではあるが高いことが示されている。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で76.5%、統合保育未実施園では、69.4%と統合保育実施園の方が7.1%と、僅かに高いことが示された。
- ④ 「生き物に直接触れられる」についても、統合保育実施園で86.2%、統合保育未実施園では、82.6%と統合保育実施園の方がほんの少し高い。
- ⑤ 「科学的な態度や力が育つ」は、統合保育実施園で27.3%、統合保育未実施園では、15.4%と統合保育実施園の方が11.9%とほぼ1割強も高い。
- ⑥ 「仲間関係にも好影響」や「職員や保育内容にも好影響」や「表現活動につながる」の、いずれも、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的にほぼ同程度であった。
- ⑦ しかし、「表現活動につながる」では、統合保育実施園の方が逆に、統合保育未実施園よりも7.4%も低いことが示されてあった。このことは、どのようなことを意味しているのか、考える必要がある。

(6) 無認可私立保育園における統合保育実施園と統合保育未実施園での相違

表6 無認可私立保育園／託児所における  
統合保育実施園と未実施園における動物飼育活動の有効点

	統合保育実施園数：4	統合保育未実施園数：29
優しさや・思いやりが育つ	75.0%	44.8%
生死・成長・生態を理解できる	100.0%	20.7%
自然・生き物に直接触れられる	75.0%	51.7%
科学的な態度や力が育つ	25.0%	0.0%
園生活の動機づけになる	25.0%	6.9%
仲間関係にも好影響	0.0%	10.3%
職員や保育内容にも好影響	25.0%	3.4%
表現活動につながる	25.0%	17.2%

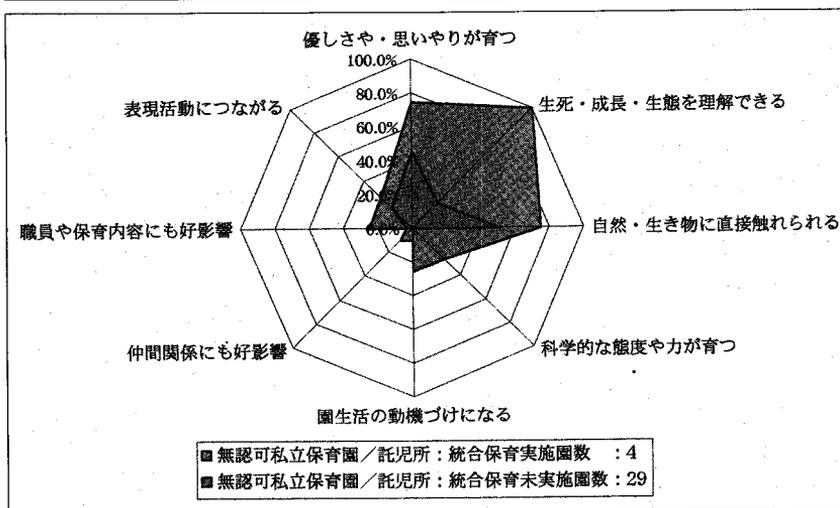


図12 無認可私立保育園／託児所における統合保育実施園と統合保育未実施園にみる動物飼育活動の有効点

上の表6, 図12から示唆されていることは概略以下の諸点である。

- ① 無認可私立保育園や託児所における統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも「仲間関係にも好影響」以外の項目において、有効性に際立った相違の有ることが示されている。
- ② 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で75.0%、統合保育未実施園では、44.8%と統合保育実施園の方が30.2%と、ほぼ3割も高いことの持つ意味は極めて大きいと考えられる。
- ③ 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で100%、統合保育未実施園では、20.7%と統合保育実施園の方が79.3%とほぼ8割も高いことの持つ意味も極めて大きいと考えられる。
- ④ 「生き物に直接触れられる」は、統合保育実施園で75.0%、統合保育未実施園では、51.7%と統合保育実施園の方が23.3%とほぼ2割も高い。
- ⑤ 「科学的な態度や力が育つ」、「園生活の動機づけになる」の二つの項目に於いては、いずれも、統合保育実施園で25.0%、統合保育未実施園では、0%と統合保育実施園の方が25%も高い。このことの持つ意味も重要である。
- ⑥ 「職員や保育内容にも好影響」や「表現活動につながる」の、いずれも、統合保育実施園の方が統合保育未実施園よりも全般的にほぼ8%から22%ほど有効性が高い割合で挙げられていることである。特に、「職員や保育内容にも好影響」では、前者が、25.0%であるのに対して、後者が3.4%と21.6%も高いことも高いことは、注目に値する。
- ⑦ しかし、「仲間関係にも好影響」については、統合保育実施園の方が逆に、統合保育未実施園よりも6.9%も低いことが示されてあった。このことは、どのようなことを意味しているのか、考える必要がある。

## 結 論

就学前教育の重要な役割を果たしている保育園や幼稚園の場における「動物飼育活動」の取り組みを、岩手県内にある、国、県、市町村の公、私立また、認可、無認可を問わず、全ての幼稚園、保育園および託児所等を対象に、筆者が1998年11月に実施した「動植物介在活動に関するアンケート調査研究」を下に、障害児を含めた統合保育を実施している園と統合保育未実施園での動物飼育活動の「良かった点：有効性」の結果を比較すると、概ね以下のことが明らかになった。

- ① 「優しさや思いやりが育つ」は、統合保育実施園で78.5%、統合保育未実施園では、68.6%と統合保育実施の方がほぼ1割も高い。
- ② 「生死・成長・生態を理解できる」は、統合保育実施園で84.2%、統合保育未実施園では、58.7%と統合保育実施園の方が、実に2.5割も高い。
- ③ 「生き物に直接触れられる」は、統合保育実施園で87.2%、統合保育未実施園では、75.9%と統合保育実施園の方がほぼ1割強も高い。
- ④ 「科学的な態度や力が育つ」は統合保育実施園で25.6%、統合保育未実施園では、16.7%と統合保育実施園の方がほぼ1割弱ではあったが高い。
- ⑤ 「仲間関係にも好影響」は、統合保育実施園で36.5%、統合保育未実施園では、31.8%と統合保育実施園の方が4.7%と若干高いことが示されている。
- ⑥ 「職員や保育内容にも好影響」は、統合保育実施園で40.1%、統合保育未実施園では、25.8%と統合保育実施園の方が1.5割も高いことが示されている。
- ⑦ 「表現活動につながる」は、統合保育実施園で38.8%、統合保育未実施園では、25.3%と統合保育実施園の方がほぼ1.5割弱ではあったが、やはり高いことが示されている。
- ⑧ 「園生活の動機づけになる」では、統合保育実施園で31.7%、統合保育未実施園では、27.2%と統合保育実施園の方が4.7%ではあったが、やはり多少高いことが示されている。

これらのことから、示唆されているように、障害児や障害の疑われている子どもたちと、健常といわれている子どもたちとの日常的なかかわりやふれあいを行いながら、統合保育を実施している園の子どもたちの方が、動物飼育活動を通じて、相乗的な効果として「優しさや思いやり」などの気持ち、また全般的に、動物飼育活動の「良かった点：有効性」の高いことが明らかとなった。

21世紀が、「共生」をベースにした、「新子どもの世紀」にふさわしい子どもたちを育む保育・教育のひとつの活動として、動植物飼育栽培活動を組織的、体系的に位置付けることは、極めて重要である。

## 文 献

- 鎌田文聰、1999、保育園・幼稚園における「動植物の飼育、栽培活動」の岩手の現状—保育園・幼稚園における「動(植)物の飼育(栽培)活動」に関するアンケート調査—、人と動物のこころ研究会、杜陵プリント社。
- 鎌田文聰、2000、乳幼児と動植物飼育、栽培活動—岩手の幼稚園・保育園の実態調査(続報2:「有効性」を中心に)—、人権感覚の発達とその指導、岩手大学教育学部附属幼稚園、岩手大学教育学部附属小学校、岩手ワークショップ、80~89。
- 鎌田文聰、2001、乳幼児と動植物飼育、栽培活動—岩手の幼稚園・保育園の実態調査(続報3:「生死」への対応)—、岩手大学教育学部研究年報、60(2)、61~75。

鎌田文聰, 2001, 乳幼児および小学生と動物飼育教育—岩手県における実態調査より—, 第132回日本獣医学会学術集会講演要旨集, 日本獣医学会 35.

鎌田文聰, 2001, こころを育てる—乳幼児と動物飼育活動—, 第132回日本獣医学会学術集会講演要旨集, 日本獣医学会 35, 5.